平成２２年度　第２回島根県社会教育委員の会

日時：平成２３年２月８日（火）

１３：３０～１６：００

場所：サンラポーむらくも　祥雲の間

１　開　会

２　教育長挨拶（今井教育長）

３　出席者紹介（齋藤ＧＬ）

４　議　事

【議決事項】

（１）社会教育関係団体に関する補助金について

【協議事項】

（１）神々の国しまね～古事記１３００年～関連事業について

（２）平成２４年度全国図書館大会について

（３）平成２４年度中国・四国地区社会教育研究大会について

（４）来年度の主な施策について

【意見交換】

○有馬委員　では、次の意見交換へ移りたいと思っております。今日は「地域の教育力をいかに高めていくか」～人材養成の視点から～、というテーマを与えていただいています。

県の社会教育委員は年間２回ほどこの会で意見を申し上げる役割になっておりまして、非常に貴重な場でございます。この意見交換の場がこの会議の非常に重要な部分になっております。過去、記録化もされておりましてごらんになっていらっしゃると思いますが、各委員の方々から非常に貴重な意見が出てきておりまして、これが県の教育委員会の施策に反映されているわけです。

そこで、このテーマにつきまして、焦点化して御議論をいただけたらと思うわけでございますが、時間も限られておりますので、端的な御発言をお願いしたいと思います。

まず、テーマについてペーパーをつくっていただいております。「意見交換について」というペーパーが１枚ございます。これについて事務局の方から説明されますか。

○三島社会教育主事　御自由にいろいろ意見言っていただくのも大変参考になるんですけども、今回「ふるさと教育推進事業」のアンケートと「学校支援地域本部事業」の調査を行いました。ペーパーの中でいろいろと数字も上げておりますが、両調査の自由記述欄で人材の固定化、あるいは高齢化を懸念する声が学校に関わっている人たちからも、学校からも非常に多く寄せられました。そこで、人材養成の視点から、まず、学校や地域活動に参加する人の固定化や高齢化が懸念されている現状において、いかにたくさんの人を巻き込んで新しい人材を育てていくか。そのための施策の展開とか機運をどのようにして盛り上げていったらいいのかという視点、論点。さらに、その地域の人材を結んでいくコーディネーターの養成やシステムづくりが今後一層重要になっていくので、どのように展開していくか、という視点。この２点、実際に参加する人をどう増やしていくか、というのと、人材をどううまくつなげていく、人材の人材みたいな感じなんですけど、それをどう養成していくかという２点に論点を絞りまして御意見を伺えたと考えております。

○有馬委員　趣旨がおわかりいただけたでしょうか。今、論点を２つ上げていただいております。地域の教育力を高めていくためにはそれにかかわる人間、人材が必要なわけでございますが、それが固定化されているということで、もっと幅広くいろいろな人たちが地域の教育にかかわっていくという状況をどうやってつくっていったらいいか。いわば新しい人材をどう育てていくか。この辺、非常に重要だということで。

　次に、関連する人たちをつなげていく、あるいはコーディネーター役をどう育てていくか、あるいはどうシステムをつくり上げていくか、こんなことが考えられるわけで、その２つの論点はお互いにかかわっているように思いますので、どちら側を重視した御意見でも結構かと思います。いかがでございましょう。それぞれ御経験の立場からフリートーキングをしたいと思います。

○松本委員　これができたら、がんの特効薬より難しいゆえ、ノーベル賞ものですよね。がんの特効薬ができたよというようなもんで。これが解決できればすごいですけどね。

○有馬委員　それじゃあ、坂本さん。

○坂本委員　松本委員の言われる特効薬じゃないかもしれませんが、自分自身が子育て支援とかかかわってきて思うことですが、世代ごとの人材育成のプログラムを確立していくのが必要じゃないかと思います。私もそろそろ熟年コースに入りますので、熟年コースはコースで頑張ってやらないといけないと思っております。おせっかいなおばさん、おじさんも大事にしていかないといけませんし、それが島根県の宝だと思います。

私はＮＰＯをやっております。人材育成で、研修をしてこの道を極めたいな、という方がおられると思うので、社会貢献コースというのをつくって、ＮＰＯ法人になってもらったり、専門的な活動をされてもいいんじゃないかなと。

それから、特に若い人ですが、子育て支援とかやってもボランティアの部分が多いんです。そうじゃなく、それが仕事につながる。公民館で子育て支援のサポーターを雇うとか、もし、できたらそういうものが仕事につながっていくんじゃないかと。若い方とお話をしてると「ボランティアはできるんだけど、子どもが小学校に入ると仕事をしないといけないのでやめちゃう」という人が結構いらっしゃるんです。そういうのをつないでいけないかなと思っております。私自身が自分の子育てと一緒に子育てサークルをつくって、それがＮＰＯにつながっていった部分もあるんです。その中で一番大事にしてきた、助けられた部分はネットワークです。仲間が一緒にいることでした。今日、参加していらっしゃる栗栖委員も一緒に活動をしています。そういう部分を大切にしたらいいんじゃないかと思っています。特効薬にならないかもしれませんけど、一つ提案させていただきます。

○有馬委員　栗栖さん、名前が出ました、関連して。

○栗栖委員　予算に地域振興のものが「実証！地域力醸成プログラム」に入ったということですけれども、私は社会教育という名前に変わった中で、教育委員会がどれだけ首長部局に「なぜ社会教育が必要か」ということをきちんと論理立てて説明できるか、とても大事だと思っています。行政施策を見ると、どこでも「市民との協働のまちづくり」と書いてありますけれども、自分たちの地域の課題を主体的に学び、本当に解決していこうという主体性とか、学びながらという、最も社会教育が大事にしてることができる市民が育たない限り、いくら行政が「地域課題にこういうことがありますよ」と言っても、それはさせられる、行政の都合のいい兵隊でもないですけども、そういう施策になってしまいます。

将来的にお金が減っていった時にお金はない、主体的な人材は育っていない、結局、総合力は落ちます。そういうことをどれだけ全庁で理解しているかということで、今、社会教育関係者の研修、教育畑の方も一生懸命されていますけれど、しっかり社会教育を語ってる自治体や県では、一般行政の職員に対しての研修をきっちり組んでいます。その辺の壁はとても厚いんじゃないでしょうか。そういう意味で寺井企画幹（社会教育課併青少年家庭課青少年育成スタッフ）は他部局に行ってらっしゃいますので、その辺の声をもっと出していただきたいです。少子化対策推進室の「こっころカンパニー」【※仕事と家庭の調和と男女共同参画の推進により、子育て中の従業員を積極的に支援する企業を島根県が

「しまね子育て応援企業（こっころカンパニー）」に認定し、積極的なＰＲと融資制度での優遇などにより認定企業を支援する制度】というのがありますが「こっころカンパニー」確かに働き方の時間配分のことはしますけど、そこに教育というエッセンスはないわけです。「こっころカンパニー」の子どもたちはきちんと朝御飯を食べているのかとか、福祉部局の中に、そういう子どもの教育というエッセンスが足りないです。

今、本当に子どもの育ちに資する福祉の環境が教育的にあるのかっていうことを、教育委員会サイドでは社会教育主事を使いながら支援していく必要があるかなって思います。そこの辺の共通認識を持つと社会教育で頑張ってる人たちの予算がとりやすくなってくるだろうと思います。そういうことがない限りなかなか厳しい。実証するのは現場の一つ一つのエピソードの積み重ねだと思いますけれど、現場が一生懸命頑張ってる、積み重ねをきちっと可視化していくところを行政サイド、特に社会教育主事がしっかりとしていただかないと、非常に公民館の職員さんの労働条件も厳しいものがあります。私たちに何ができるんだろうというところで、ちょっと申し上げたいと思いました。

○有馬委員　非常に大事なものを含んでいますが、今、社会教育主事という言葉がいくつか出てきました。寺井先生、名前も出ましたが。

○寺井企画幹　本籍は社会教育課にありますが、知事部局の健康福祉部に行っております。本来の仕事は児童相談所とか児童養護施設がありますので、就学した子どもさんが何か問題があったり事件があったりすると教育委員会と健康福祉部をつなぐ調整役で入っています。社会教育主事として地域に派遣された経験も持っています。今の立場で思うのは、例えば少子化対策推進室の「しまね子育て支援プラス事業」【※一層きめ細かい子育て支援環境の整備のため、国や県の既存制度では対応できないものについて、包括的に県が市町村に財政支援を行う事業。２７のメニューが設定されているが、そのなかで教育活動に活用できるメニューもある】などは教育の、例えば公民館の通学合宿とか子育て支援とかに使えますので、福祉部局のお金を少し教育の方へ持っていって使ってもらって、連携したり結びついたりしていけるきっかけになるのではないかと強く思います。実際に「子育て支援プラス事業」を教育委員会なり公民館へ連絡する橋渡し役をさせていただいたところです。もっともっと結びつけばいろいろなことができるんではないかと感じるようになってきたところですけど、私一人の力ではなかなか。今、声を出し始めたというところが現状でございまして、簡単にはいきませんけど頑張ってみたいと思ってます。

○有馬委員　栗栖さんの御要望なり願いなりにつながるところが、出たと思います。

○佐々木委員　今、お二方のお話を聞いておりまして、社会教育での人材というお話で、幼稚園とか保育園でいけばＰＴＡ活動をしてくださる人に当たるのかなと思います。やはり幼稚園のＰＴＡ会長をしてくださったり、各専門部長をしてくださった保護者の方は公民館に行ってサークル活動をするなり、体育祭で体育部の仕事をするなり、その地域ですごく活躍しておられる方が多いです。それからサークル事業にも積極的に参加されるし、交通安全で見守り隊になって活躍される。保育園とか幼稚園で初めて保護者の方が出会って、その中で自分たちの活動を自主的にやっていかれるっていうところが、育っていかれる一番の原点に当たるのかなと思いながら、お話を聞いたところです。

県ＰＴＡ連合会合同連絡協議会で、ＰＴＡの中央研修大会とか支援してくださっておりますが、なかなか今の方は人のために一生懸命働くボランティア精神ばっかりじゃなくて、自分がやってみて、ああ、やってみたらすごく楽しいな、よかったなっていう、そういう実感が伴わないと次のステップに上がっていけないところがあります。ＰＴＡ活動をやってて保護者の方が一番良かったのは「友達ができてよかった」「悩みがお互いに語られてよかった」「私だけじゃなくて他の人も困ってたんだ」とか「人が喜んでくれたことですごく満足感が得られた」ということをおっしゃっています。やって良かったという思いを公民館活動でも何でもですけど、子どもさんと一緒にやってみてわかったっていう気持ちをどこで味わわせて、どこで伸ばしていってあげるかということがこれからの担い手をつくっていく鍵になるんじゃないかなと思っています。人の心ですので、心を育ててあげられところが一番肝心かなと思います。じゃあどうすればいいかというと、ちょっとわかりませんけれど、考えてみたらと思います。

○有馬委員　今の意見は栗栖さんにもつながると思いますが、要するにいい経験を親としてされることがＰＴＡ活動にしても、その後の人材養成というか、社会貢献をするような人材を育てていく上でも大事だということだと思います。

ＰＴＡ役員の人はいろいろ公民館に広がったりして社会の人材として活躍していくんだけど、その他の人がいい経験するっていうのも大事なんだけど、その辺を広げる妙案はないんですかね。一般の人にも役員さんと同じような意識が広がらんかっていうことが。

○佐々木委員　前は「ＰＴＡをやりたい」って自分から名乗ってこられる人がすごく多かったんですが、今頃は押しつけ合い。「あなたやって」「あなたやって」っていう押しつけ合いのＰＴＡ活動に変化しています。子どもの数も少なくなるとやってくださる方が本当に限られて、ここに書いてあるとおりで人材の固定化と高齢化が、そのまま若い世代も

当てはまっている感じがするんです。それでも１人１つの役割っていうところで、どこの幼稚園もですけど、誰かが何かをしないと今はＰＴＡ活動もできない時代ですので、多かれ少なかれの役割を持たせてあげて、その中でやって「私、嫌だな」と思う人はもう二度と入られませんけれど「ああ良かった」と思う人は次に向かっていかれる。答えにならないかもしれません。

○有馬委員　いえいえ。役を持つということね。

○佐々木委員　はい。

○若菜委員　今のＰＴＡの活動について、私は高校の執行部を３年間やらせていただいた経験があるんですけれども、押しつけることを私たち三役はするのではなくて、逆に保護者を巻き込む手法を考えました。高校の時に提案をしまして、一つは地域の保護者会。高校は広範囲で来られるので、バス通や自家用車でっていう地域性もあります。そこを学校の先生に知ってもらおうということで、三隅を第１回とし、浜田高校の三浦校長先生（当時）でしたけれども、御理解いただきました。高校の先生が来られ「この時間で三隅へ下るのはかなり時間がかかるんですね」「ここで汽車を離れるといろんな地域があって、暗くなってなかなか帰れないんですね」っていうようなことがわかり、部活動を少し早く終わらせるということも御協力いただきました。どこの地域からも自分たちもやってほしいということで、今もさせていただいてるかと思っております。

もう１点は、ＰＴＡがお願いをしている面がたくさんあると思うんですね。保育園、幼稚園からずっと。高校となれば受験勉強がたくさんあります。遅くまで先生たちが関わってくださいます。そういうところから、学校の先生も遅くまで本当にありがとうございますということで、温かい豚汁を保護者でつくって、職員室に持っていってあげましょうという提案をさせてもらったら、じゃあ文書で、ニンジンでもいい何でもいいから、子どもさんを通して材料を集めさせてもらって、それでつくらせてもらう。そうすると、私も協力したいからということで保護者さんが調理室にどんどん集まってきていただいて一緒につくったという事例もあります。

今までのは事例ですけれども、今日のこのテーマで、アンケート結果を見させていただいている中で、上がってるパーセントもあれば、下がっているものもある。社会教育委員にならせていただく中で、当初から３部局の連携をかなり声を出させていただいていたんです。先日、あるお母さんに出会いました。不登校の小学生の女の子をお持ちの方ですけれども、児童相談所での生活もかなり多いお子さんなんですけれども、一緒にお子さんと

おられたので「元気？」と声をかけました。「今、行ってるの？」って言ったら「学校は行っていません」と。「児相にも行かせてたんだけども、もう連れ帰りました」と。「どうして？」って言ったら、「本当にこの子のことを理解して受け入れてくださっているのかしら。家に帰っていたら大きな声で、〇〇ちゃん、〇〇ちゃん元気？どうしてる？って、玄関を叩かれました」と。「私は腹が立ったから出ませんでした」と。「近所に迷惑っていうか近所に知られたくないのに、どうしてああいうことをされるんでしょうかね」って。こういう場で生の声を言った方がいいかと思ってお伝えするんですが、保護者と行政との本当の連携、信頼関係っていうのはどうやったら得れるのかなというところから、保護者の方もいろいろな思いがありますが、行政の方の入り方っていうか、勉強っていうか、必要じゃないかなと思います。

もう１点は、プライバシーの保護を前提に出していくと、一人一人の支援ってできるのかなって最近思うんです。坂本委員や栗栖委員と一緒でＮＰＯでやっておりますけれども、ＮＰＯだからできるところ、行政だからできるところ、これが一体化なれば本当にいいんじゃないかなって思ってます。私もボランティアで仕入れた声を行政に返して、そこから互いに支援をしていくっていうことが本当に、プライバシーを前提に持ってきてもいいけれども、こちらも常識は持っているつもりですので、そこで信頼し合いながら情報提供をして支援していくことがいいことかなと思っております。

また、地域の方々、公民館利用される方の固定化っていうのもあります。なかなかそこに若い者が入っていけないという声も聞いております。その方たちの子育て時代と、私たちが子育てをしてきたときの時代の違いとか、そういうのも公民館でお勉強っていうか、今はこうなんですよというふうに伝えていく講座っていうのも必要ではないかなと。ただメディア、メディアではなくて現状の、今の地域のお子さんはこうですよということもちょっと取り入れていくのも必要ではないかなと思いました。

〇有馬委員　どうもありがとうございました。どうぞ。

〇小室委員　以前、教育委員会主催で「しまね県民大学」があって、県７カ所ぐらいですか、隠岐にも来ていただきまして、地域課題をテーマとした学習活動がございました。これがなくなり大変寂しい思いをしております。人材育成のことですけども、島根県は高齢者がたくさんおりますし、私もそうでありますが団塊世代が今、職場からリタイアをして人がたくさんおると。あと、それを地域のリーダーとしてどう育てていくかということになりますと、育てていくという面でいうならば教育委員会が島根県の中ではプロでありま

すし、市町村でいえば一般行政よりは教育行政の方が人を育てるのは専門家であります。また、社会教育主事等も各教育委員会に配置されております。ただ、そういう視点と予算とがかみ合わないところが今かなと。そういう面でいいますと、私どもの地域の公民館も頑張っておりますけども、人が減り、予算が減らされ、町村合併しますと力が弱ってきてるなというのは見かけるところでございます。

ただし、地域には人、いえば役場をリタイアしたり教員をリタイアしたりする人たちはたくさんおりますので、それをどのような仕組みですくっていくかということではないかと思います。一つ言うならば、以前ありました「しまね県民大学」のように各教育事務所単位でのリーダー養成塾、人づくり塾を展開する。ただし、なかなか県の予算はとりにくいでしょう。２３年度、島根県は神話のこと、古事記のことをテーマとしております。その面で言うならば、県立図書館は松江で文化講座を開催をされておられます。ただし、県の図書館でございますので、エリアは島根県全体でございますから、子どもさん向けには移動講座とか講師派遣とかというのをやっておられると思います。市町村の社会教育施設、公民館、図書館等、県の図書館なり教育委員会と、どう連携ができるかということではないかなと思います。

もう一つは、社会教育研修センターで隠岐でも社会教育施設等の職員の研修はやっておられると思いますが、地域リーダーといいますか、そういう研修がどうかなと思っております。地域リーダーもそういうところへ参加できるようなＰＲ、そういうメニューも開発されたらいかがなものだろうかなと思います。地域のリーダーが、例えば隠岐あたりですと松江まで来て研修受けるということになりますと、これは費用がかかりますからなかなか難しいところがあります。既存施設で、既存事業で、古事記のことなんかはぜひ隠岐でもやっていただくと嬉しいかなと思います。人はたくさん地域にいると思います。どう育てていくか、育てる視点をみんなで考えていく必要があるんではないかと思います。

○有馬委員　小室委員はどちらかというと退職した高齢者の方々を中心に人はたくさんいる、それをうまく養成していく、活かしていくという論点と思います。

坂本委員が世代ごとの人材養成、世代ごとに違うんじゃないかっておっしゃったんですけど、小室委員は高齢者側ですね。それを考えていく上で行政間の連携が見逃せない、大事だと。民間の地域リーダー、これも高齢者を意識していらっしゃるかもしれませんが、どう養成していくかっていうことが大事じゃないかということをおっしゃったように思います。

○小室委員　以前に溝口知事の「豊かな日本をどうやってつくるかー地方から考えるー」という本を送っていただきました。読ませていただいて、すごい観点から物事を見ておられるなと思って感服をいたしました。できれば知事のお声で聞かせていただくような社会教育委員の研修会とか、県全体の委員の研修会をしていただくと、各委員のレベルも上げていく必要があるでしょうし、平成２４年には中国・四国地区社会教育研究大会が開かれるということですし、全国図書館大会も開かれるということでございますので、ぜひよろしくお願い申し上げます。

○有馬委員　それでは次、行かせていただきます。

○宗内委員　吉賀町の教育長をしております宗内と申します。今日、雲南の土江教育長が御欠席なので、先程から聞いていて大変自分の耳が痛い部分もありまして、栗栖委員の発言に対して少し行政としての私の考え方を申したいと思っています。

確かに社会教育の関係を町長、首長部局に十分伝え切れなかったというのは現実だろうと思います。この会の皮肉を言っとるんじゃありませんが、実は町の社会教育委員の会が２回しかありませんでした。「なぜ２回なのか」と担当者に聞きますと「事務局でつくった計画を提案し、最後にこうやりましたという形でやってます」。それで「中で何をやってるの」と言ったら、全く何も見えなかったということがありまして、２２年、大変無理をして６回まで増やすことに何とか予算的には成功をしました。１回つければ余程のことがない限りは落とされないだろうという確信のもとでやってるわけですけれども、予算は非常に削られやすい部門にあると理解をしながら、今、進めているとこです。今年は家庭教育の部分を中心に、社会教育委員の会で６回話をしていただき、私の方にそれなりのものをいただこうと考えています。したがって、それぞれの教育委員会で社会教育をどう伝えていくかという一番大事な部分を、それぞれの市町村で誰かが声を出していかないと、難しい部分があるのかなと私は感じているとこです。

それから人材育成ですけれども、後でお答えをいただきたいんですが、親学のファシリテーターを県教育委員会としてはどれぐらいの目標値で育てられようとしているのかということが知りたいと思っています。先程からＰＴＡの話が出ていますけれども、研修会をしても出られる方は毎回参加をされますけれども、出られない方にはほとんどその内容が伝わらないという状況があります。私が今仕組もうとしておりますのは、２３年の４月から学校のＰＴＡ研修会へ、ちょうどうちにファシリテーターが２名養成できましたので、これを行かせて保護者の中からファシリテーターを引き出そうと考えています。うまくい

くかわかりませんけど、それが先程、坂本委員が言われました年代別の一つは養成にもなるのかなと思っているとこです。

なかなか社会教育の部分、目に見えない部分ですので、町長に話をしても、十話しても六から七ぐらいしか受け入れてもらえない部分たくさんあるんですけれども、何とか教育行政を携わる者としてやっていこうと考えています。

○有馬委員　宗内委員はそれぞれの市町村レベルで、今おっしゃったように努力をなさってることがあるという御報告のような御意見でした。

○松本委員　この一枚紙の数字見ますと、地域コーディネーターを継続して配置することに非常に教育現場からの思いが強い。逆に悲鳴が上がっているということなんでしょうけど、実際、私が地域に帰って公民館、体協、自治会等々をやると、意外と教員の姿が見えない。後をついてくる、指示待ち教員が非常に多い。市町村職員、公務員も意外と姿が見えない。頑張ってるのは商店街のおっちゃんとか、老人会とか頑張ってやってる。非常にメンバーが固定されているわけです。

それぞれが課題を抱えてます。特に悲鳴を上げられてる教育現場。さっきおっしゃった校長先生とか園長先生とかが声をかけられて、それからＰＴＡの主なメンバー、それから地域で活躍してる人、これもすぐ顔がわかります。この人とこの人とあの人を引き込めば、大体網羅されるという人で、座楽、夜楽、座って、飲んでもいいと思います。学は楽しむぐらいな感じですよね。学ぶじゃなくて楽しむぐらいでいいと思うんです。「何かできないかね」と気楽に話し合ってできること、楽しみながら非常に緩やかなものからやって、学校行事であるもの、今あるものをうまく利用する。学校行事で保護者、子どもがいるところに地域の人が入っていって何かちょっと楽しいことをやってもらう。逆に地域の行事があったら学校も入ってもらって、楽しみながら何かやってもらうという形で、楽しみながらというところから出発点ぐらいで、少しずつ少しずつ、いきなりジェネレーションギャップのあるような、携帯やってるようなお父さんお母さんを引っ張り出すのはなかなか大変ですから。何か楽しみながらすっとそちらに引き出す、仲間をちょっとずつ増やしていく。非常に地道だとは思うんですけども、一つの方法として考えられるのではないのかという感じがしています。

○有馬委員　楽しみながらということは、無理なく自然に、そういう意味合いが含まれているんじゃないかなと思って伺いました。

○福間委員　「実証！地域力醸成プログラム」をやっていただいて４年たちました。まさ

にこれは日本一の事業でございまして、私も出かけていって本当にいい思いをさせていただいております。こういうことをもっともっと全国に広げるようなことをやらなきゃいかんなということを、話し合っておるところでございます。あるいはふるまい向上、さらに中山間地のこともやらせていただけるようでございまして、本当しっかりやらなきゃいかんなという気がしておるところでございまして、まずお礼を申し上げておきます。

佐々木先生が、少し前はＰＴＡにも手挙げてやる者がいたと言われますが、私はあまりそんな体験がありませんでね。大体、出雲の人間は、やりたくても引っ込んじょうですわ。石見の方はそうじゃないですが。

それで、私は２０年ほど公民館長をやりました。松江の公民館の一番の特徴というのは、地域公民館区のいろいろな団体の事務局を持っとることです。それで職員が忙しいけれど、みんな事務局を持って世話してやっとるんですよ。糸で全部結びつけられておる。したがって、例えば子どもの健全育成いうことになると、はい、体協はこの分を持つ、この部分は自治会だ、この部分は社協だというような分業が非常にうまくいくんですね。年に１回か２回、そのリーダーを集めて一杯飲みながらよもやま話やりますわ。そうすると案外いい知恵が出るんですね。それは高齢者もおるし、若い者でもそれぞれの団体で出てきておる。自治会から当番で出させられておるのもおりますけれども、見ておりますと非常に一生懸命やるなっていうのが点々目につくんです。それを活動の舞台へ乗せてあげるとうまく活動してくれるんですね。だから養成するということよりも、むしろ人材を見つけて舞台に乗せておだててやる。そのことが大事だなという気がします。教育長さん、どうですかね。時には旅費を出してやって、研修会、講習会なんかに出かけさせてやる。そうするとだんだん上がってまいりまして、それで自分から、「ＰＴＡ会長やります」っていう者はいませんで。そうでしょう。だから、それがたとえ渋々でも、やっぱりおだててやるとやるもんですが。

○有馬委員　公民館が優秀であれば地域の諸団体のコーディネート役を公民館がやって、人材育成にも寄与していくという機能が生まれてくるということだと思いますが。

○小原委員　何か方法論としてしか見てないんですね。我々は同じ人として地域を一緒につくっていくっていうことであって、小手先のものではないと思うんです。地元の公民館長がこういうこと言ってたんです。「子どもにお父ちゃんとお母ちゃんどっち好き」って言ったら「おばちゃん、同じまんじゅう２つに割ってどっちうまいと思う」って、こう言って答えたって。親にふさわしいもんがおれば、きついもん、厳しいもんもいると思うん

です。でも子どもは育っておるんです。言葉じりとるわけじゃないんですが、やってみてよかった、じゃなくて何をみんなにしてほしいかが問題なんです。

今日の提案は、それじゃあ何をしなきゃいけないか、どのようにそれを届けていくかっていうことだと思うんですが、それを具体化してない部分があるので、余計に方法論の方に行ったと思うんです。人を遊ばせる、人の都合のええこと、人を楽しませること、あるいは場所に集めること、いわゆる物質的に物を与えてよかったということではなく、どれだけ人間を熟成させるか、熟成する内容を、そのベースをつくるのが私は社会教育だと思うんです。その時には市民の皆さんとぶつからないけん。でもやる時はそれをしなきゃならんのです。そのところをやっぱり本気でやらないと。人材をどうやって使うかじゃないんです。一緒に育ったものの中で、どれだけリーダーシップをお互いにとっていくかという、得意分野をもって自信を持っていけるか、と思うんです。

今、家庭の日という話が出ました。あるいは、青少年協会がありました。子ども会がありました。今、スポーツ少年団がありました。これは行政の各分野それぞれ勝手にやっとるんです。実際には同じ子どもを育てましょう、とやっとるんです。例えば益田市の教育委員会で青少年もあれば家庭の日もある、子ども会もあるわ、少年団もある。これを早く行政の方で一本化してください、と思います。島根県の中でも、子どもをとらえた時に、どこでとらえるかっていうのを、行政で整理していただきたいと思います。

○有馬委員　栗栖さんですか、どうぞ。

○栗栖委員　学校地域支援本部のアンケートを見ながら、支援本部事業の発展のため「地域コーディネータを継続して配置する」、私、多分、「少し思う」にしたと思っています（栗栖委員は浜田一中の地域コーディネーター）。これを始める前から私の中では、ある一定のコミュニティーに子どもの育ちにかかわるキーマンを置くことが最終目標だと思っています。それは学校支援だけではなくて、ゼロから１８、もしかしたらお母さんになるまでのその全部、福祉も教育も全部トータルで、あるいは産業もＰＴＡも学校も、あらゆる子どもにかかわる多様な主体を見ることのできる人を地域に置くことが大事と思います。さっきの一本化、現実のフィールドでは必要かなって思います。教育っていうのはどうしても上からなんですが、福祉はどうアウトリーチするか、まず相手の困ったことからスタートするアプローチを持っています。親学っていう成人教育ですから、いろいろあるのに、ある一定のところにしかなかなか、あるいは強制力を与えないとアプローチできない弱さがあります。でも、福祉部局は赤ちゃん全数訪問から始まってすべての子どもが同じライ

ンで生まれて、同じラインで育つようにという非常に福祉的なアプローチを持っています。そういうものをトータルでプロデュースしたりすることを、地域の方の具体的な知恵を巻き込みながら地域でデザインしていけるような人が公民館の中に本当にいれば、それはプロフェッショナルと言えると思います。そういう人たちは、坂本委員とか担っているような人たちの中に恐らく育ってきてる可能性もある。そこにはまだ足りないスキルや感覚、学びがあるかもしれませんけれど。浜田だったら年間子ども５００人も生まれません。その子どもたちの半分は学童保育に行く。都会でインフラ整備だって言ってることに合わせるような施策ではだめだと思います。少ししか生まれない子どもの半分以上は学童保育で育つならば、もっと豊かな体験を学童保育に、人材も投資してもいいんじゃないか、島根は東京の感覚とは違うところにいる。特に子どもに関しては、もう待てない状況であると考えると、連携とかじゃなくて総合力を上げていく仕組みを、社会教育委員の方からぜひ発信していただきたいと思います。そういうことが本当にないと、それぞれの頑張りは疲れてしまう。それを私はとても思っております。

○有馬委員　最後に総合力っていう言葉をお使いになったんだけど、行政や住民、いろいろな立場でやってることの全体が見えないといけない。社会教育課としてもさまざまな分野のつながり、結びつきにどういう問題があるかっていうことが見えなくなってるから、見えるようにしたいというお気持ちだろうと思っています。意見を聞きたいというのも、そういうことかなと思います。社会の仕組みが非常に進展したためにお互いに反対側の組織の動きが見えなくなったり、行政が住民側が見えなくなったり、住民が行政側が見えなくなったり、いっぱい起こっている。いかに総合力、子どもに子育ての総力的な力をどうつなげていくかということだと私は受けとめました。

○大岩委員　昨夕、テレビで、ＮＨＫだったでしょうか。「ふるまい向上のことをやってます」というので松江一中が出てて、えっ、ふるまい向上と思って見たんです。子どもたち自身、いじめをしないことに向かってやっていて、そこに参加された親御さんも「とってもいい勉強ができました」と意見を言ってらっしゃって、メディア通して、実際にやっていることを県民の皆さんにお知らせすると「ああ、ふるまい向上ってこういうことなんだな」「こういうことをやってるんだな」ということがわかっていいなと思いました。

　私もふるまい向上を浸透させていく立場として役立てれるのかなと思って、学校回りをしていますけども、ある保育所に行きました時に、４０分間ぐらいちゃんと正座をして、本当にしっかりとお話が聞けた、そういう保育所がありました。ここは何か違うなと思っ

て、後で所長先生にお話を聞いたら「うちは１カ月に１回、地域のお二人の方に来ていただいて茶道をしています」と。茶道の時間、短いんだけれども、毎月、子どもたちの口に合うように和菓子屋さんにお願いして小さな和菓子を季節によってつくってもらって、そして１カ月に１回の茶道をやってるんだ、っていうことで、正座が苦にもならないし、本当に気持ちのよいあいさつをしてくれたんです。ちょうど同じ時期に京都のある女子校の校長先生が「自分のところは何年も茶道を取り入れて、子どもたちに礼儀作法などして、社会に出て人間としての振る舞いに役立っていったし、子どもたち自身も感謝の心がわいてきました」とインタビューを受けておられました。京都府は府内４３校ぐらいの高校があるそうなんですけど、その高校が必須科目に茶道を入れて、文化の伝承もありますけれども、子どもたちの精神的な向上に役立てたいということで京都府はそのように取り組んでいるというニュースが流れていました。

私もこの家庭と学校と地域の連携を重視していくと。そしてコーディネーターの養成とか意識的にはとても高い内容でテーマがありますけれども、先程ほどからもお話が出てますように、例えば保育所の中で茶道を取り入れていきましょうと。そしたら、親御さんとかを通じて、どなたかボランティアで来てくれる人はないでしょうか、そういう感じで募集をしていくとか、一遍にコーディネーターを養成するといってもどの分野に卓越した、どれを取り上げたコーディネーターなのか。一般的にもコーディネーターといってもすごい分野が広くなると思うんです。そうした時にそれを受けて、じゃあやっていきますよ、という人たちが出てくるのだろうかということも懸念されました。そして、システムづくりはやっぱり少しずつ小さな歩みを通して、一遍には花開かないかもしれない。県教委が上げてらっしゃる一つ一つの内容を見ると、地道な活動が必要ではないかと思いました。

要望ですけども、昨年の夏、社会教育委員の全国大会ありますから行かれませんか、と文書を頂きました。私の周りの人たちは、これは絶対行って勉強してきたらいいよ、と押し出してくれたんですけど、かといって全国へ１人で、宿泊も自分で探して旅費も自分で出していくというのは、もう一つ踏ん張りができないというか。地域の教育力を高めるための人材養成も必要かもしれませんけど、私たちの社会教育委員の向上というものもとても必要ではないかなと思います。全国大会とか中四国大会があれば、もう予算が来年度は決まっておりますから無理でしょうけれども、少し補助をしていただいて声をかけてくだされば、じゃあ行こうかなとか、勉強しに行きたいなという気持ちになると思います。全国とか中四国の大会を見ないまま、この２４年度の中四国大会を迎えて、お手伝いしてく

ださい、と呼ばれても要領がわかりません。少し、考えていただければなと思いました。

○有馬委員　全国の社会教育研究大会の参加のあり方に対する要望があったわけでございます。社会教育委員も地域の教育の重要な人材で、それをどう養成し、強めるかっていうことも大事なことかもしれません。

○赤水委員　先程来、皆さんそれぞれに本当に心にしみるようなお話をいただきまして、ありがとうございました。私は以前、各地の公民館の活動報告をお聞きしたことがあるんです。公民館長さんがそこまで頑張っておられるのか、ということを初めて知りました。今、公民館を中心にやっておられるということもわかったわけでございます。先程お話がありました、放課後子どもクラブ、それから読書、読み聞かせ、これを私たち婦人会でさせていただいております。

私たち婦人会では地域を安全安心、住みよい地域にしようというのを目的にしておりますので、ふるまい向上は本当に婦人会にはありがたいことでして、各地で頑張ってやっております。課長さん（大矢社会教育課長）から婦人会へお話をしていただきまして、各地でまたお話を聞かせていただこうと盛り上がっておりますし、私の町でも、来年の総会にふるまい向上について来ていただく機会をつくろうと、今から計画をしておりますので、よろしくお願い申し上げます。

大岩委員が茶道の話をなさいました。私も茶道をしてまして、高校へ教えに行っております。最初に驚きましたのは、本当にスリッパでもばあっと投げて上がって、私が言いましても「はい」と返事がございません。おじぎができません。家庭教育が一番だな、とは思いながらも、私のできる範囲内で「茶道とはただお手前をすることだけじゃなく、人への思いやりの心、どうぞ、お先にという気持ちが根本でございます」そういうことを子どもと話し合いをして、高校生ぐらいになりますと人の道ということも学校で教えていただいておると思いますので、素直に聞いていただいております。これ、即ふるまい向上でございまして、私の孫も保育所でお茶を先生から教えていただいて「おじぎをすることを習った」と電話で報告してくれました。本当に嬉しく思いました。「頑張ってね、今度帰ったらおばあちゃんと一緒にお茶のお勉強とか、おじぎとかしましょうね」と話しました。やはり小さい時からそういう環境に育つことが大切であると思っております。

先程来、皆さんおっしゃいましたように、人づくりが一番大切ではないかなと私も思っておるとこでございます。婦人会の皆さんと私たちが社会との橋渡しと申しましょうか、私たちが子どもさんへ良い手本を示していこう、それにはまず人への思いやり、そして笑

顔ですね。これが大事じゃないだろうかと思います。知らない人でも「おはよう」っておっしゃると、本当にその日一日楽しい気持ちになります。私自身もホテルに泊まりましてエレベーターの中に入ります時は「おはようございます」と言います。不思議な顔をして私をご覧になりますけれども、みんながそういうふうにごあいさつできる世の中に持っていくことが大事ではないかと思っております。私どもは皆さんのお役に立つことは惜しみませんので、婦人会に対して何でもおっしゃっていただきますと私たちもお手伝いができると思っております。

○神委員　論点に出ております人材養成、新しい人材育てていく、私はこのことがまず違っていると思います。育てるのではなく、島根県職員、教育委員会、そしてこの社会教育委員も含めて共に育つというのが本来のあり方だと思います。ふるまい向上についても、ふるさと教育についても、もとをただせば島根県から全県民に対して発案したことでございます。であるならば、職員が各市町村に赴き、心の言葉で一人一人に向き合うことが何よりだと思うんです。既に、先程、婦人会のところで大矢課長の名前が出ましたけれども、やっておられると思うんです。文書を渡して読むのではなく、本当に今必要なんだということをそれぞれの立場から県民の方に、あるいはそこにいらっしゃるコーディネーターに、公民館職員に対してお話をしていき、共に育とうではありませんか。そういう姿勢を皆さんに出した時に、共感された方が「じゃあ、私も一緒に」と汗を流すような気がしてならないんです。もちろん、ここにいる社会教育委員もそのメンバーであることには違いありません。必要となった時にはお声をかけていただき、私たちもその現場に行かせていただき、こう考えますが皆さんいかがですかということで協力を惜しまないことが何よりも不可欠であろうと思います。「あなたが言うたんだからあなたが責任とってやりなさい、わしゃ知りませんよ」そうではなくて「共に育とうではないか」と、このように思います。

一方「今、ふるまい向上が必要ですよ」と県が言わなければいけなくなった事態というのは現在の社会構造にあるわけですけれども、それを今とやかく言うてもせんないことです。これから５年先、１０年先のことを考えて今一度考えていただきたいことがあります。何年か前、前教育長（藤原義光　前教育長）が「感動することが大切なんだ。そしてそれが生きる力につながる」とおっしゃいました。そのとおりだと思います。そのためには、ふるさとの隅々を見詰める、観察する子どもをつくらなければならないと思います。ふるさと教育というと、えてしてそこに生まれ育ったからふるさとだという間違った気持ちになってしまう。しかし、ふるさとのことを何も知らずに大きくなって１８歳で街を出てい

った時に何も持っていない、しんがなければ都会の新しい文化の中で翻弄されてしまって自分を見失ってしまう。やがて定年退職になって帰ってきてからも、さあ、自分のふるさとをどう思うかといった時に、何もないと言うてしまうのではないか。子どもの時分に感動する心、地域を観察する力をやっぱり身につけることが必要であろうと思うんです。

実は毎週のように私どもの美術館にフランス人の親子がやってきます。和紙の職人を育てるプログラム、これに御主人がやっている。奥様は娘さん２人を連れて散歩に行くんですが、その散歩先が美術館なんです。聞くと、小さい時から日曜日に礼拝があって、その後、美術館に行くのが習慣だそうです。その子どもは３歳でありながら「この絵がいいとか、この絵、私は苦手」とかって言うんだそうです。

振り返って我が子を見た時、父親が美術館職員であるから弁当を届けに来たり、あるいは催し物に来る、それはありますけれども、本当に絵と対峙したことがあるだろうかと考えた時に恥ずかしく思うことがあります。どうしても学校の授業には受験ということが出てきて、受験に関係する科目を優先的にやっていく。そして中学校段階では主要５教科と副教科という扱いになっていく。なおかつ、その副教科の時間数は年々減っていき、選択になり、総合というふうになっていく。それに伴って文化、芸術に対する見方がどんどん低下してるような気がしてならないんです。そういう力が伴わなければ、当然、地域を見詰める力も醸成されるわけもなく、結果、受験、受験、受験。果たしてその方向が正しいだろうかと思うようになりました。将来の島根のためには、私は、受験も大事ですけれども、それを否定する気はございませんが、人格教育を今一度考えるべきだと思うんです。

主要５教科と言われているものの中でも、受験に関係するものが今度は重視されていって、受験科目から外されたものは多分同じような運命をたどっていくんではないか。例えば私の専門である地理学は、今、受験科目からどんどん外されています。そうすると地理学をやっている人間っていうのは総合的に地域をとらまえる力がありますけれども、その力さえなくなっていく。日本の歴史を知らずに大人になっていく子どもが増えていく。決してこれは尋常な姿だとは思えないんです。地域の教育力を高めていくには、現在においては私たちは今できる限り、今ここで暮らしている市民の方たちにお願いをしていく。そして将来においては、子どもたちのために今一度、自分たちの教育が本当に正しいかどうか振り返る必要があるのではないかと思っております。

○有馬委員　一つは育てるんじゃなくて共に育つという視点が非常に大事だということ。それから人格教育がありました。人格教育という視点で人育てを考えていかなくちゃいけ

ない。これは小原委員がおっしゃってる人間の熟成とかともつながってくると思います。

○堀川委員　先程、有馬先生がおっしゃった、総合力というお話から続いてですが、私は図書館の方の立場で言いますと県立図書館でお話ししたことがあるんです。読書普及委員の方が県内回ってらっしゃるんですが、そこで一人一人のお母さんにお話をしているんですが、そこの場をリーダー養成の場にはできないか、と。そうした、地域でリーダーになってくださる方向けのお話っていうのも一つあるだろうと。そういう研修会もあるだろうとお伝えしたんです。「親学プログラム、ファシリテーターどういうように養成しているんですか」という質問もありましたが、それぞれの担当部局でどういうようなリーダー養成をしているかという、年に何回かのお話し合いっていうのはあると思うんですが、ぜひ、その横のつながり、そして行政だけではなく現場のボランティアの方々、私は図書館の立場ですので読み聞かせのボランティアなどのおつき合いはあるんですが、先程、赤水委員のお話で婦人会も読み聞かせしてくださってるんだというのがわかりました。ボランティアの代表の会があるんでしょうか。知らないものですからここでお聞きしますけど。もしあれば、ボランティア同士で何に困って、いろいろな分野のボランティアでどこが今困ってるか、どういうように養成をしているのかっていう、余りにも大規模な会になってしまうのかもしれませんけれど、そうした横のつながりがあるといいな。そして一人一人のボランティアが年１回はお祭りみたいなことがあって、ボランティア５年勤続したら何かお祝いをとか。邪道ですけど、目標とか、何かをやったことの楽しみっていうか、そうしたものが何か用意されているといいなと思います。

もう一つ。今、文科省で「子育てを絵本で楽しく」というパンフレットを作成中です。ＰＤＦで文科省のＨＰに上がるだけなので、なかなかパンフレットの形にならないんですが、お母さん方にも読んでほしい。お父さんにも家族にも読んでほしい。子育て支援センターとか、図書館の研修にも使ってほしいっていう意図でつくられているものなんですが、そうしたものが来た時、どのように皆さんにお伝えできるかという情報の流れのシステム、情報を共有する、流れるっていうシステムがどうなってるのかなと思って伺ってみました。

○有馬委員　堀川委員からは担当部局同士のつながり、ボランティア団体同士のつながり、連携、連絡、そういうものが現状うまくいってるかどうか、どういうつながりをしようとする動きがあるのか。事務局で何か説明がありますか。

○大矢社会教育課長　さまざまなボランティア、分野がございます。そうしたものを網羅する組織、仕組みは県の中では実はありません。ただ、そうした社会貢献や地域貢献をす

るさまざまな人たちは、例えば社会教育、地域振興、それから集落営農という活動をしています。それから社会福祉協議会でもボランティアの部分をお持ちです。

それから、ＮＰＯという団体もあります。また、お話しがあったように社会教育の中でも婦人会の読書活動といった、さまざまなものがございます。

行政も細分化、専門化してばらばらになっておりますところ、大変遅きに失しておりますかもしれませんけれども、お互いがまだよく知ってない部分もありますし、重なってる部分や一緒にやればより効果が高まるものもあるんではないかということで、社会貢献というキーワードで連携をより深めるために、昨年あたりから意見交換が始まっております。県のレベルではまだその段階ですが、多分、市町村のレベルですと、ある程度見える関係だと思います。松江市はボランティアと公民館、さまざまな地域福祉も含めて連携しておりますので、県もそういった状況を進めて、より強い連携をつくっていきたいと思ってます。

栗栖委員もおっしゃってましたが、社会教育というものが首長部局に、その理念や役割とか考え方っていうのがなかなか理解されてないという問題点、非常に根源的な御指摘だと思ってます。そうした中で、私どもも地域振興とより連携を深めて、中山間実践枠のような格好で新しい挑戦をモデルとして始めようと思ってます。地域振興と連携する中で、実際の活動の中からリーダー養成であったり、新しい人材も育てていくこともできていくのではないかと期待をしておりますので、ぜひそういった事柄を社会教育委員の皆様にも見守っていただければなと思っております。

それから、宗内委員からファシリテーター、親学の養成数のお尋ねがありました。目標は毎年６０人ずつを３カ年、１８０人と想定をしておりますが、天候の加減などで急にファシリテーター養成講座に来れなかったこともあって、今年度４９名という養成数が出ております。３年間順調にやりますと１５０名ぐらいのファシリテーター養成ができるのではないかと。１５０は公民館の約半分ですし、それから小・中学校合計数の４割に当たる数字でございます。ファシリテーターが現場の中で学校や公民館活動とも連携する形で親学が展開できればいいかなと目標は持っております。

○有馬委員　今、堀川委員から出た各部局同士とかボランティアなどの組織間同士の連携のような問題は、今日、私どもに与えられましたシステムづくりにかかわって重要なことと思いますが、現実的にはなかなか連携っていうのはうまくいってない、うまくいくことが難しい現状にあるんじゃないかと思います。

佐々木委員の分野の幼児とか小さい子どもの教育、育ちを考える上でも、厚生労働省と文科省が連携すればいいと言いながらなかなかできないところがあるように、行政だけではありませんが、地域振興一つとってもいろいろな部局がかかわりながらも、うまくいかない。それから地域振興と地域の教育力とかも関連の深い構造的な問題なんだけども、その間の連携一つとってもなかなか現実はうまくつながっていないところがあるように思います。その辺がうまく解決していくことが、つながりが出てくることにも、人材が育っていく上でも、教育力アップの上でも大事だということが、いろいろなところから出てると思います。何か最後に一言でもおっしゃりたい方があれば。

○坂本委員　今日、情報提供でチラシを置かせていただいた「つながるネ！ット」は、５年前に発足し民間と県の方と一緒につくった団体です。本当に緩やかで、この間まで申し合わせ事項ぐらいで会則もありませんでした。でも、この中で確実に人が育っておりますし、緩やかさっていうのはとても大変なんです。お互いが自分たちでやろうという気持ちで動いております。今回、県から予算をいただいて研修をするのですが、こういうとこから少しずつ動いていけたらいいかなと思っております。若菜委員も私もＮＰＯでやっております。思いの強い人間が、やるんだったら頑張ってやろうと動いております。紹介させていただきました。

○有馬委員　ネットワークで子どもたちを育むっていう非常に大事なテーマであるように思います。今日の私どものいただいたテーマにもつながる問題だなと思っております。

そもそもこういうテーマが私どもに与えられた背景には、若い人も高齢者も子どもの育ちにしても、地域の活動にしても、関わろうとしない人たちが非常に増えてきてるっていう現代的問題に対する提起も含まれているように思います。私も若い人や子どもたちを見てますけど、なかなか、みんなが自分のことで精一杯で、地域のこととか他の子どもだとか、そういうことに意識が回るだけの余裕がない。我が事で精一杯なところがあちこちに見られて、そういった状況もマイナス要因になってると思いますし、人のことには余り口出しせんとか、ちょっかい出さないとかいう遠慮ぎみな出雲人、あるいは島根県民の資質も関わっている感じもします。ですが、それらを超えて総合力となるつながりをどう生み出していくかっていうことは、御議論いただいたように大変大きなテーマでございます。あちこちで一生懸命になれば自然にいろいろつながりが出てくるという面もあって、それが大事だという目標感、強く意識として持つということがまず第一で、神委員も言われましたが、共に考えるとか共に育つとかっていう姿勢を、みんなが真剣に持つようになれば

また動きも変わってくるかなと思います。

この課題は恐らくこの１時間半やそこらの議論で済むような問題ではありませんので、この場はきっかけにすぎない、と考えざるを得ません。今日出ました意見を社会教育課で整理していただきまして、生かすとこがあれば生かしていただきたいと思います。

私はこの場がいつもいろいろ意見を聞かせていただくいい機会になっておりまして、社会教育委員にとって良い研修の場にもなってると思っております。この場以外でも研修の機会が生まれればいいなと思います。それでは、私の進行は終わらせていただきます。

○齋藤ＧＬ　有馬先生には委員の皆さまの御意見を多くお引き出していただき、誠にありがとうございました。閉会に当たり、今井教育長から御挨拶申し上げます。

○今井教育長　本日、本当に長時間にわたりましてありがとうございました。最後に有馬先生から本日の問題提起の意味合いとか議論のまとめをしていただきました。ありがとうございました。

今日、お聞きをしておりまして、いろいろな御意見を頂戴しました。「人材の養成」という言葉はよく使われますが、今日のお話を聞いておりますと人材といいますか、担い手は、もう既に存在しているんだ、というご意見がありました。ただ、その担い手をどのように、我々が言っております教育活動、あるいは地域活動に参加してもらうかということが、一番問題だと思います。その中で、気楽に参加できる方法として「座楽」という言葉も松本委員からいただきました。教員とか公務員の参加が町内会なんかでも少ないという、これは御指摘でございますが、我々自身が「ふるまい向上」で出かけていって、我々が地域の人に呼びかけるということが大事だなということを、今日、痛感をしたところであります。そういう点、県民の皆さんへの情報提供も含めまして、今後力を入れて取り組んでいきたいと思います。

それから、いろいろ地域での研修活動、あるいは学習機会の提供、充実について御意見も頂戴いたしましたし、それから公民館の活動、ふるまい向上に関しますプレゼンをやったらどうか、あるいはテレビスポットをやったらどうかという御意見も頂戴いたしました。そういうことを今後の施策に生かしてまいりたいと思いますので、また折に触れていろいろ御意見を頂戴したいと思います。本日は本当にありがとうございました。

○齋藤ＧＬ　以上をもちまして平成２２年度第２回島根県社会教育委員の会を終了いたします。本日はお忙しいところ、大変どうもありがとうございました。